



〈雑録〉獨逸國労働者保険法施行ノ結果(2)

瀧谷，善一

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 9(1):120*-129

(Issue Date)

1910-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051599>



獨逸國勞働者保險法

施行ノ結果 (其二)

商學士 瀧谷 善一

(四)

次ニ勞働者保險ハ防災設備ノ進歩ト衛生機關ノ發達トヲ促シタルノ效大ナリ。災厄保險ニアリテハ罹災者ニ支給スベキ保險金ハ凡テ備者ノ負擔ニ屬スルヲ以テ、備者ハ其負擔ノ輕減ヲ計ランガ爲メニ防災設備ヲ完全スルハ自然ノ勢ナリ。今二三ノ例ヲ舉ゲンモ、伯林災厄保險組合ハ市ノ各所ニ災害救護所ヲ設ケ、晝夜此處ニ醫

師ヲ派シ手術用品及ビ手術器具ヲ具フ。又工業者組合ハ危險物ノ取締ニ關シ嚴重ナル規定ヲ設ケ人命救助機ヲ備ヘ、安全昇降機ヲ設ケ、器械ノ周圍ニ柵ヲ施シ、自働的ニ器械ニ注油ヲ行フ設備ヲ作り、特別ノ方法ニヨリテ調革ノ上下ヲ爲ス裝置ヲ爲シ、被害者ノ救助ヲ爲シタル者ニハ賞金ヲ與フルコト、シ、且此等ノ規定ノ勵行ヲ期スル爲メニ監督官ヲ置ク等、災害ノ豫防減少ヲ計ルノ手段ヲ講ジツ、アリ。

カクノ如ク災厄保險ニ於テハ防災設備ノ進歩ヲ來セルト同ジク、疾病保險ニ於テハ衛生機關ノ發達ヲ促セリ。ミュンヘンニ於ケル或地方疾病保險組合ハ商店ヲシテ其使用人ニ椅子ヲ供シ且晝食後ノ休暇ヲ與ヘシメテ使用人ノ衛生狀態ノ改善ヲ計レリ。其他各市ニ於テハ衛生學特ニ肺結核其他塵埃ニ基ク疾病ニ關スル講演ヲ催シ衛生思想ノ發達ヲ促セリ。其結果獨逸ニ於テハ死亡率ハ次第二減少シ、千八百八十五年ニハ千

人ニツキ二七、二人ナリシモノ、千九百七年ニハ一八・九八人トナリ、伯林ノ三慈惠院ニ於テハ肺勞ニ基ク死亡率ハ千八百八十九年乃至九十年ノ五十四名ヨリ千八百九十八年乃至九十九年ノ三十四人ニ減少シタリトイフ。

抑、保險ハ一ノ善後策ナリ。災厄疾病ニ基ク損害ハ個人ヨリ見レバ、保險制度ニヨリテ之レヲ輕減除去スルコトヲ得ベシト雖モ、社會全體ヨリ見レバ、一度生ジタル損害ハ絶對的ニシテ遂ニ之レヲ輕減除去スルコトヲ得ズ。從ツテ保險制度ガ損害發生ノ根本タル災厄疾病ノ發生ヲ増加スルガ如キコトアランニハ保險ハ社會上完全ニ其目的ヲ達シタリト謂フベカラズ。知ラズ、獨逸ニ於ケル勞働者保險ハ此點ニ關シ如何ナル結果ヲ齎シタルカヲ。

先ヅ第一ニ疾病保險ニ付キテ之レヲ觀察スルニ、疾病保險法實施後次第第二(一)被保險者ノ疾病ニ對シ支給スル一人宛ノ保險金ハ増加シ、

(一) 一疾病期間毎ニ支給スル保險金モ増加シ、
 (二) 疾病中支給スル一日宛ノ保險金モ増加セリ
 次ノ統計ハ此事實ヲ表ハスモノナリ。

疾病保險ニ於テ支給セル保險金額

年	總支給額	一人宛	一疾病期 間宛	疾病日 一日宛
一八五	四七四〇〇・一二	二六四二	一八八	二〇二
一八六	五三〇四一・〇九	三〇九九	二〇二	二〇二
一八七	五五二〇七・〇七	三二七六	二〇四	二〇四
一八八	六二五六一・四八	三四九三	二〇六	二〇六
一八九	七〇九七五・九一	三二五五	三〇七六	二二三
一八九〇	八四〇四〇・二四	三二七七	三〇六九	二二五
一八九一	八六一六六・九一	三二六六	三七一九	二二九
一八九二	九四二五八・三三	三三五五	三八〇三	二三〇
一八九三	一〇二九七・六九	三四五五	三六五〇	二三三
一八九四	九九五八八・四七	三三六七	三九九六	二三六
一八九五	一〇四八二・三六	三三九三	三八七七	二二六
一八九六	一〇九七三・七九	三三八一	三九七〇	二二〇
一八九七	一一〇四八・七九	一四四五	四〇六四	二二四
一八九八	一二八〇五・三〇	一四六〇	四二六八	二四〇
一八九九	一四五三三・〇〇	一五八七	四二七四	二四〇

加之、(一) 被保險者ノ疾病ニ罹ル度數モ増加シ、(二) 被保險者ノ罹病日數モ増加シ、(三) 一疾病毎ノ恢復期間モ亦延長セラレリ。唯死亡數ノミハ比較的ニ減少セリ。次表ハ此事實ヲ明カニ示スモノナリ。

年	罹病數			罹病日數			死亡數		
	總數	數	總數	數	總數	數	總數	數	
一八八八	一七六三・五〇	三六	二九五三・八七	四四七〇	一六八	四四五〇・〇	〇九六		
一八八九	二〇二〇・二	三三	三〇四六・六二	五四四一	一六四	四八三八・〇	〇九五		
一八九〇	二四三三・五〇	三六	三九一七・六九	五九四四	一六二	五四三六・七	〇九九		
一八九一	二五九七・八六	四〇	四〇七八・六〇	五九三〇	一七〇	五四〇三・〇	〇九五		
一八九二	二四七八・二七	三五	四二七五・六〇	六四四七	一七三	五六四三・〇	〇九八		

一九五	四四五・四四八	亮八	八八〇・八三六	七七五・一九八	七七九・五〇八
一九六	四四三・七六	三七八	八七四・四四〇・五	七六二・一九八	七七三・七〇
一九七	四九六・三八八	四〇八	九七一・四八六・〇	八〇三・一九六	八三・四六〇・七七

次ニ災厄保險ニツキテモ殆ンド同様ナル現象ヲ惹起セリ。即チ災厄ノ數ガ絶對的ニ増加セルノミナラズ、被保險者ノ數ニ比較シテ増加セリ當局者モ此事實ヲ認メテ曰ク、幸ニモ死亡又ハ勞働全不能ヲ來スガ如キ重傷災厄ハ減少ノ傾向アルモ、唯一時的部分的勞働不能ヲ來スガ如キ輕傷災厄ハ増加セリトナセリ。次ノ統計ハ此事實ヲ表ハスモノナリ。

第九卷
(二三)
雜錄

一八九四	六八、六七七	六、二五〇	一、七五二	三八、九五二	二一、七二三	三・七八	〇・三四	〇・一〇	二・一四	一・二〇
一八九五	七四、四六七	六、三三五	一、六六八	四〇、五二七	二五、九三七	四・〇七	〇・三五	〇・〇九	二・二〇	一・四一
一八九六	八五、二七二	六、九八九	一、五二四	四四、三七三	三二、三八六	四・八四	〇・三九	〇・〇九	二・二五	一・八四
一八九七	九一、一七一	七、二八七	一、四五二	四六、四八九	三五、九四三	五・〇八	〇・四一	〇・〇八	二・五九	二・〇〇
一八九八	九六、七七四	七、八四八	一、一〇九	四七、七六四	四四、〇五三	五・三〇	〇・四三	〇・〇六	二・六二	二・一九
一八九九	一〇四、八一	七、九九九	一、二九七	五一、二四〇	四四、二七五	五・六三	〇・四三	〇・〇七	二・七五	二・三八
一九〇〇	一〇六、四四七	八、四四九	一、三六六	五一、一一一	四五、五二一	五・六三	〇・四五	〇・〇七	二・七〇	二・四一
一九〇一	一一六、〇八九	八、三五九	一、四一六	五四、三四〇	五一、九七四	六・一五	〇・四四	〇・〇八	二・八八	二・七五
一九〇二	一二九、九〇一	七、八四二	一、三九六	五五、二六四	五五、三九九	六・二八	〇・四一	〇・〇七	二・九〇	二・九〇
一九〇三	一二七、九四七	八、二三六	一、五一七	五八、一二九	六〇、〇六五	六・五七	〇・四二	〇・〇八	二・九九	三・〇八
一九〇四	一三六、一二六	八、五五二	一、五七八	六二、五六三	六三、四三三	六・八五	〇・四三	〇・〇八	三・一五	三・一九
一九〇五	一三九、七八七	八、七五七	一、四七六	六三、五三〇	六六、〇二四	六・九一	〇・四三	〇・〇八	三・一四	三・二六
一九〇六	一三八、二八三	八、九七〇	一、四五四	六〇、八一四	六七、〇四五	六・六七	〇・四三	〇・〇七	二・九三	三・二四

前ニ述ベタルガ如ク災厄保險實施以後防災ノ

設備大ニ完全トナリシニ拘ラズ、此事アルハ頗ル奇異ナル現象ナリトセザルヲ得ズ。而シテ之レガ原因ハ災厄保險ニ依リ勞働者ハ容易ニ傭主ヨリ職務上ノ災厄ニ對シテ救済ヲ受クルコト、ナリタルガ爲メ、自然災厄ノ豫防ヲ怠ルニ至レ

ルニ在リト爲ス説明ニ對シ、當局者ハ全然之レヲ否認シテ曰ク、保險ノ存在スルガ爲メニ人ガ其指ヲ切斷シ、其脚ヲ挫折スルヲ甘ンズベシトハペーデイカーノ言ヘルガ如ク人ノ自己保護ノ本能ニ反スル議論ナリ。災厄ニ因リテ被ルベキ苦痛ニ對スル恐怖心、傷害ニ因リテ生ズベキ結果ノ不安定ハ寧ロ自ラ災厄ヲ惹起シテ保險金ヲ得ントスル望ヨリモ強ク人心ヲ支配スルモノナ

リ。況ンヤ保險金ノ支給ハ多少トモ日給ノ三分ノ二ニ過ギズ、且故意ノ災厄ニ對シテハ全然保險金ノ支給ヲ爲サルモノナルニ於テオヤト。

サレド實際ニ於テ勞働者ガ所謂自己保護ノ本能ニ悖ル行爲ヲ敢テスルコト稀ナラザルヲ如何セン。故ニ吾人ハ當局者ノ此推理の議論ヲ離レテ何故ニ防災設備ノ完全トナリタルニ拘ハラズ輕傷災厄ノ増加ヲ來セルカヲ事實ニ就テ研究スルコトヲ要ス。而シテ之レガ理由トシテ唱ヘラル説四アリ。

(一) 第一説ハ災厄保險實施以後災厄ノ報告ガ以前ヨリモ精密ニ行ハル、ニ至リシ結果、統計上ノ災厄數ガ以前報告ガ疎漏ナリシ時代ヨリモ増加シタルナリトノ説ナリ。此説ハ災厄保險實施以前ト以後トノ短日月ノ間ノ比較ニ於テ、災厄數ガ一時増加シタルガ如キ場合ニハ或ハ眞相ヲ穿テル説明トシテ採用シ得ベケンモ、災厄保險實施後二十年ヲ經過セル今日、猶災厄數ガ

次第ニ増加スルノ理由トシテハ承認スルコトヲ得ザルベシ。

(二) 第二説ハ器械使用ノ増加、大工場ニ於ケル勞働者ノ集中ヲ以テ輕傷災厄増加ノ原因ト爲スモノナリ。サレド此説モ亦甚ダ薄弱タルヲ免レズ。蓋シ災厄増加ノ割合ハ器械ノ使用盛ナル工業ニ於テヨリモ、器械ノ使用多ク行ハレザル農業ニ於テ著シケレバナリ。(保險ニ依リテ填補セラレタル災厄數ハ工業ニ於テハ十八年間ニ三十七割八分ノ増加ナルニ對シ、農業ニ於テハ十六年間ニ四十九割二分ノ増加ヲ示セリ)。加之、今災厄ノ度數ノ多少ニ依リ各種職業ヲ分類スルトキハ、器械ヲ使用スルコト比較的多カラザル事業ニ於テ災厄數ハ最も多ク、器械ノ使用盛ナル事業ニ於テハ却テ災厄數ハ少キコトヲ示セリ。即チ被保險者千人ニ對シ災厄ノ爲メニ保險金ノ支給ヲ受ケタル者ハ、車輛ノ驅馳ニ從事スル職業ニ在リテハ百六十九人七、磨穀業ニ

アリテハ百三十五人一、鑿石業ニ在リテハ百十九人四、ナルニ、鐵道業ニ在リテハ五十八人六金屬工業ニ在リテハ四十二人一、織物業ニ在リテハ僅ニ三十四人一ナリ。是レニ依リテ觀ルモ器械使用ノ増加ガ災厄増加ノ原因ナリトイフ此說ノ維持セラルベカラザルコトヲ知ルニ足ルベシ。

(三) 第三說ハ近時産業ノ勃興ニ伴ヒ不熟練ナル職工ガ多ク使用セラル、ニ至レルコトガ災厄増加ノ原因ナリトスル說ナリ。此說ニ對シテハ統計ヲ以テ明カニ之レヲ反證スルヲ得ザレド災厄ガ中年者又ハ老年者ヨリモ寧ロ青年ニ於テ少キ事實ハ多少此說ヲ否認スルノ力アルモノナリ。今千八百九十七年ノ統計ニヨリ被保險者百人中災厄ニ罹レル者ノ數ヲ年齡ヲ基トシテ示セバ左ノ如シ。

十六歳以下 ○二四 四十歳乃至五十歳 一・二三
十六歳乃至十八歳 ○三二 五十歳乃至六十歳 一・三八

十八歳乃至二十歳 ○三六 六十歳乃至七十歳 一・四三
二十歳乃至三十歳 ○五四 七十歳以上 ○八五
三十歳乃至四十歳 ○九二
勿論青年ハ必然的ニ不熟練ナル職工タルコトヲ證明スルノ材料ナシト雖モ、カク推定スルコトハ強チ失當ニ非ザルベク、從ツテ此第三說ノ根據モ亦薄弱ナルコトヲ察スベキナリ。

(四) 第四說ハ災厄保險ハ勞働者ガ何等負擔ヲ爲サズシテ一ニ傭主ノ贖金ニ依リテ行ハル、モノナルコトガ一般勞働者ニ知レ渡ルニ從ヒ、勞働者ノ災厄ニ對スル警戒ヲ魯鈍ナラシメ、他人ニ依頼スルノ念慮ヲ強ムルコトガ軈テ災厄増加ノ原因ヲ爲スモノナリトノ說ナリ。即チ災厄増加ヲ以テ主トシテ外形的ノ原因ニ歸セズシテ大體ニ於テ心理的ノ原因ニ歸スルモノナリ。而シテ此說コソ肯綮ヲ得タルモノナリト信ズベキ理由アリ。

勞働者ノ心理狀態ガ災厄ヲ惹起スニ大ナル關

係アルコトハ疑フベカラズ。此事ハ七曜中災厄ノ多キ日、一日中災厄ノ起ル時ガ人心遲緩ノ際ナルノ事實ニヨリテモ證明シ得ベシ。災厄ノ最も多ク起ルハ農業タルト工業タルトヲ問ハズ月曜日ニシテ土曜日之レニ次グトイフガ如キハ此適例ナリ。而シテ今災厄ノ原因ヲ觀察スルニ、

原因

一八八七年 一八九七年

傭者ノ過失

二〇・四七% 一七・三〇%

勞働者ノ過失

二六・五六 二九・七四

傭者勞働者双方ノ過失

四・六一 四・八三

第三者ノ過失

三・四〇 五・三一

其他(職業ノ危險等)

四四・九六 四二・八二

傭者ノ過失ニ基ク災厄ノ次第ニ減少セルニ反シ、勞働者ノ過失ニ基ク災厄ハ次第ニ増加セリ

傭者ノ過失ニ因ル災厄ノ減少シタルハ災厄保險法ニヨリ災厄發生ノ結果損害ヲ被ル者ハ傭者自身ナレバ、其自衛上災厄ノ減少ニ力ヲ用ヒタルニ因ル。凡ソ災害ノ結果損失ヲ被ルベキ者ハ災害ノ發生ヲ防グニ最モ力ヲ注グノ事實ハ千八百

五十年設立セラレタル製造業者火災相互保險會社ノ例ニ見ルモ明ナリ。同會社ハ相互組織ナレバ火災ノ損害多ケレバ各製造業者ノ負擔重ク、火災ノ損害少ケレバ各製造業者ノ負擔輕シ。從ツテ各製造業者ガ各自火災ノ防止ニ力ヲ致スハ當然ニシテ其結果次ノ如キ損害ノ減少ヲ來セリトイフ。

年 次

保險金百弗ニ對スル損害ノ割合

一八五〇—一八五九 〇、三六三一
一八六〇—一八六九 〇、二四二七
一八七〇—一八七九 〇、二〇九八
一八八〇—一八八九 〇、一九六三
一八九〇—一八九九 〇、一〇八〇

災厄保險ニ於ケル傭者ノ地位ハ恰モ上述ノ火災保險ニ於ケル各製造業者ノ地位ト同ジク、災厄ノ防止ニ力ヲ盡サバ盡ス程各自ノ負擔ハ輕クナルヲ以テ自然災厄ノ防止ニ力ヲ致スベキモ、勞働者ニ在リテハ即チ然ラズ。勞働者ハ災厄保險ノ資金ニツキテハ何等贖出ヲ爲スモノニアラ

ズ。其災厄ニ罹レル場合ニ受クベキ保險金ハ一ニ備者ノ負擔ニ屬スルヲ以テ、災厄ヲ輕減スルコトニ就キ、何等利害關係ヲ有セズ。從ツテ動モスレバ災厄ノ豫防ヲ怠リ、又ハ輕微ナル傷害ニツキテモ直チニ保險金ノ支給ヲ請求スルガ如キ結果ヲ生ズ。此ノ如キ心理的原因ガ即チ輕傷災厄ヲ多カラシムル原因ニシテ、備者ノ力ヲ致セル防災設備モ未ダ此心理的原因ヲ打破スルヲ得ザルモノナリ。

次ニ勞働者ガ勞働保險ニ依リ自助ノ精神ヲ失フニ至レル事實ハ獨逸ニ於ケル預金ハ全體ニ於テ増加セルニ拘ラズ、小額預金ガ却テ減少セル事實ニヨリテモ之レヲ知ルコトヲ得ベシ。

年	預金總額	増加額	増加割合	六十馬以下ノ預金總額	増加額	増加割合
一八八〇	一、五九三	百方馬	...	七三五	...	...
一八八五	二、二六二	六八	四	一、二三四	四八九	四
一八九〇	三、二八一	一、〇一〇	四	一、九〇九	五五	三
一九〇〇	四、三四五	一、〇六四	三	一、九七三	六九	三

バルトヘルメ博士ハ其著書ニ於テ上述ノ統計ヲ掲ゲ、獨逸ニ於テハ下等階級ノ爲メニ設ケラレタル貯蓄銀行ハ實際下等階級ニ依リテ利用セラル、コトナシトイヒ、從ツテ下等階級ヲシテ之レヲ利用シテ貯蓄ヲ盛ンセシメンガ爲メニハ此種ノ預金ニハ特ニ高率ノ利子ヲ附スルノ必要アリト主張セル程ナリ。

(五)

要之、獨逸ニ於ケル經驗ニ依レバ、強制保險ノ施行ニハ完全ナル行政組織ヲ必要トス。而シテ勞働者保險法施行ノ結果ハ產業ヲ萎靡セシムルコトナク、又賃銀ヲ下落セシムルコトナキモ被保險者ノ心裡ニ惡影響ヲ來スコトヲ忘ルベカラズ。防災設備ノ完全トナリ、重傷災厄ノ減少セルニ拘ラズ、輕傷災厄ハ次第ニ増加シ、衛生

機關ノ完備シ、死亡率ガ減少セルニ拘ラズ、罹病ノ數次第ニ増加シ、一罹病ノ期間次第ニ延長セルノ事實ヲ見ルニ於テハ、勞働者ハ全體トシテ此種ノ保險制度ヲ濫用シテ不當ニ疾病ノ増加災厄ノ頻出ヲ來セルノ事實ヲ認メズンバアラズ而シテ此ノ如キ事實ガ獨逸ノ如ク官僚政治ガ嚴格ニシテ殆ンド膠柱的ニ行ハル、國ニ於テモ存ストセバ、政府ノ官僚ガ放漫ニシテ腐敗シ、動モスレバ政治的權力ニ左右セラレントスルガ如キ國ニ於テハ其結果如何ナルベキヤ。是レカ、ル制度ヲ模倣セントスル國ニ於テ慎重ニ考量セザルベカラザル處ナリ。凡ソ新ナル法制ヲ一國ニ行ハントスルヤ、其施行ノ結果ガ外界の諸種ノ事情ニ與フル影響ニツキ研究スベキハ勿論、又其人心ニ如何ナル影響ヲ與フルカヲ考量セザレバ後日ノ禍ヲ貽スニ至ラン慎ムベキ哉。(完結)